鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 22 年 3 月 12 日）

里仁第四

7　子曰く、人の過ちや、各其の党に於てす。過ちを観て斯に仁を知る。

孔先生がおっしゃるには、人が失敗をする時は、所属するグループの中で失敗することが多いものだ。その人間が犯した過ちをみると、その人が仁者かどうか分かる。

最近のニュースで、民主党の 3 人の大臣が国会に遅れました。うすら笑いを浮かべながら謝っていましたが、その後の言い訳をみると、官僚が開始時間を間違えて教えたからだと責任を押し付けている。ですから孔子の説から申しますと、遅刻した 3 人の大臣（原口さん・前原さん・仙谷さん）は全員不仁者であると言い切れると思います。

渋沢栄一の『論語講義』の中では、過ちについて、「君子は人情の篤さで失敗をする」と語っています。例として、西郷隆盛は人情が篤すぎて、自分の命を若い者にくれてやろうと自ら滅んでいったと紹介しています。

又、「小人は酷薄さの度合いで失敗する」という例で、江藤新平を出しています。江藤新平は人に対して非常に残忍で、人とお付き合いをするのに、その人の欠点や問題点ばかりを探し出して付き合ったそうです。自分が失敗した時には、即座に大久保利通に首をはねられたと語っています。

過ちの犯し方で仁者かどうかが分かるというのは、非常に分かりやすい判断基準だと思います。

8　子曰く、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。

この言葉は、理想社会がうまれたなら、すぐに死んでも私は本望だという意味で孔子は言っていると思います。

『論語講義』では、この言葉を孔子が残したが為に、テロが日本に横行したとあります。桜田門外の変で井伊直弼を刺した尊皇攘夷の志士達の支えになったのが、この言葉のようだと残しています。渋沢栄一自身もこの言葉で奮い立って、高崎城を滅ぼして横浜に行き、

洋館を焼き払おうと決起したわけで、これははしかのような言葉だと言っています。

9　子曰く、士 道に 志 して悪衣悪 食 を恥ずる者は、未だ与に議るに足らざるなり。

「士」とは、春秋末期の身分の一つで、最下の貴族階級です。その士が、真理の道をわがものにしようと志を立てて、一所懸命学ぼうと努力しているのであれば、粗末な服であるとか、粗末な食事で肩身が狭いと感ずるようでは、まだ本当に学ぼうと思っていないのだ。だから一緒に学問をしようと思わないし、話し相手にもならない。

例えばどこかに出かける時に、着るものを意識して成金趣味で出掛けるようなことはやめた方がよいと思います。

10　子曰く、君子の天下に於けるや、適も無く、莫も無し。義と与に比う。

孔子が言うには、君子が政治を行う際には、必ずこうしようとか、断じてそうしないとかいうことはない。

「適」とは、どういうふうにしようと心に決めること。「莫」は、行うまいと心に決めることです。

心に何か決めてやっていくのは良くない。道理に従って事を処すのが良いということです。

まつりごとを行うのに、鳩山さんのようにのらりくらり方式は、悪くはないけれども道理に従って事を処すというということは無さそうですね。その時の形勢を見て決めているようなので、困ったものだと思います。

11　子曰く、君子　徳を懐えば、小 人 土を懐う。君子 刑を懐えば、小 人 恵を懐う。

君子が道徳を中心にして政治を行おうと思った場合には、庶民はのんびり出来る故郷から離れようとはしない。君子が民を導いてゆこうとする時に、法の制裁を重要視したいと思った場合には、庶民は法の制裁を逃れて、見えないところで利益を貪ろうと考えるようになる。

本日の論語の中で非常に印象的だったのは、「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」という言葉です。色々な解釈がありますが、渋沢栄一さんが、この言葉で発奮してテロを目指したというのが、ちょっと怖いと感じました。今はこういうことを考える人はいないと思います。

本日は以上です。有難うございました。